

「京都学派」と「マルクス主義」のかかわりについて  
—ある時代状況のなかで—

服部健二（立命館大学）

この報告の内容は、西田幾多郎、田辺元、高山岩男、三木清、戸坂潤、梯明秀、船山信一などの哲学者たちが、日中戦争から太平洋戦争に至る時代状況のなかで、当時重要であった時代思想の一つ、マルクス主義に対してどういう態度をとったかを全体的に見渡す一つの予備的な作業である。そのさい、論者は、哲学的・形而上学的見解と、状況に対する政治的発言や参加のありようにかかわる倫理的・実践的見解とを、切り離して考察できるものとは考えず、むしろ一体のものとして捉えて、この作業を進める。かれらの哲学がそれぞれ異なり対立するものであるにしても、哲学的・倫理的な一体性という点では、共通性がみられ、そこにまたかれらの哲学の魅力があると思われる。論者は、かれらの哲学的・倫理的見解を、哲学することがもともと持っていたよく生きるという知的営みを再考する一つのモデルとして、批判的に検討したいと考えている。

西田については、かれの時代認識と文化主義的な天皇制国家論を取り上げる。京都学派のなかで国家論の口火を切った田辺については、かれの弁証法理解を、高山についてはかれの人間学における「つくる」という労働の論理を取り上げる。三木については、昭和研究会での東亜協同体論を、戸坂については、生活の合理的営みとして学問を捉えるかれの立場がもっている哲学の批判的役割を取り上げる。梯については、西田にも影響を与えたと思われるその歴史的自然の論理を取り上げ、船山についてはその人間学的唯物論を取り上げる予定である。

なお論者は、今回の報告にかかわる内容について、主に以下のものを既に発表しているので参考のためにあげておく。

『西田哲学と左派の人たち』（2000年、こぶし書房）

「『歴史的人間学』とその技術論—三木哲学の再検討」、木岡、鈴木編『技術と身体』（2005年、ミネルヴァ書房）

「『帝国の形而上学』か『個性者の構想力』か—三木清解釈をめぐって—」『季報唯物論研究』第93号（2005年）

「日本文化論の陥穽—高山岩男における〈生む・作る・成る〉の論理をめぐって—」、大平、桂島編『「日本型社会」論の射程 「帝国化」する世界の中で』（2005年、文理閣）

Die Linken der Kyoto-Schule und ihre Rezeptionsweise der Marxismus. Synthesis  
Philosophica 37 Zagreb 1/2004 vol.19.

「『京都学派・左派』像」、大橋良介編『京都学派の思想』（2004年、人文書院）